

野方平原遺跡

—第1次・第2次調査の報告—



遺跡路号 NKH-1・2
遺跡調査番号 9975・0003

2002

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市には、多くの史跡や文化財が分布しています。とりわけ、市域の西部にあたる西区には最古の干墓とされる古武高木遺跡、環濠集落の野方遺跡など、数多くの重要な遺跡が知られています。本市では、こうした文化財の保護・活用に努めているところですが、各種の開発事業によってやむをえず失われる遺跡については、事前発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

今回報告いたします野方平原遺跡は、国指定史跡である野方遺跡の北側にあり、これまで発掘調査が行なわれることがなかった遺跡です。県道周船寺有田線の道路拡幅工事の事前調査として行われた今回の調査では、弥生時代から奈良時代の集落跡が発見されました。また古墳時代の掘立柱建物の柱穴から検出された赤色顔料は貴重な発見であります。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力をいただいた関係各位の方々に対して厚く感謝の意を表します。

平成14年3月29日
福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、一般県道周船寺有田線の道路拡幅工事に伴い、西区野方6丁目ににおいて、平成12(2000)年3月9日から3月29日まで行われた野方平原遺跡第1次調査、平成12年4月5日から13日まで行われた同第2次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、溝状遺構をSD、土杭をSK、柱穴をSP、不明遺構ないし特殊遺構をSXとしている。
3. 本書に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものである。またレベルは、道路台帳地図に記されている周囲の道路面の標高を移動して用いた。
4. 本書に用いる遺構図は、久住猛雄が実測・作成した。遺物の実測は、上方高弘、久住が行った。現場写真は久住が、遺物写真は久住と一部を上方が撮影した。製図は、廣田容子、成清直子、上方久住が行った。本書の編集・執筆は久住が行い、編集については上方高弘の協力を得た。
5. 本調査に関わる遺物・記録類(図面・写真)は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。
6. 裏表紙写真は第1次調査東半全景(西から)である。
7. 「野方平原遺跡」の名称について、以下のようないかがわしい問題がある。本来この地区的旧字名が「内ヶ浦」であり、調査地点北東に隣接し、福岡市遺跡分布地図における「内ヶ浦遺跡」(Fig.1-8)の地区の旧字名が「平原」であることが報告書作成途中に判明した。遺跡分布地図作成時の単純な遺跡名称の振り間違いと見られ、したがって本報告は正しくは「内ヶ浦遺跡」とすべきであるが、周知されている現行の遺跡分布地図には「野方平原遺跡」とあること、これまでの調査に関する文書類では全て「野方平原遺跡」の名称を使用していることから、埋蔵文化財課での協議の上、今後は便宜上、「野方平原遺跡」の名称で報告することになった。今後、遺跡分布地図の改訂作業がなされるであろうが、その際には正しい字名にもとづき「内ヶ浦遺跡」として遺跡名称を変更する予定であることを申し上げておきたい。

目次

I	はじめに	1
II	遺跡の立地と歴史的環境	1
III	調査の記録	4
1	調査の概要	4
2	検出遺構	6
3	出土遺物	10
IV	おわりに	13

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成12(2000)年2月3日付けで、福岡市土木局道路建設部西部建設第2課より、西区野方6丁目における一般県道周船寺有田線拡幅工事予定地内における、埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は、これまで本調査の実績はないが、遺跡分布図において野方平原遺跡として想定されている範囲内であり、周辺においては野方中原遺跡、野方久保遺跡などの多くの遺跡群が存在する地域でもあり、埋蔵文化財課では関係部局と協議の上、平成12年2月4日に同地の試掘調査を行った。その結果、申請地からは少數ながら柱穴や古墳時代の遺物が検出され、遺跡の存在が確認された。この試掘調査の結果をもとに、遺跡の取扱いについて事前協議を行った。その結果、道路拡幅部分について、記録保存のための発掘調査を実施することになった。対象地の東側の一部について、現況で駐車場として利用されていたがその代替地が準備されていなかったため、まず初めにこれを除く部分について平成11年度末の平成12年3月9日より調査した(第1次調査)。第1次調査は3月29日に終了した。残る東側部分については、年度明けの平成12年4月5日より調査を再開し(第2次調査)、同4月13日に調査を終了した。

整理作業は、平成13(2001)年度に第1・2次調査分をまとめて行ない、報告書を作成した。

2. 調査の組織

調査委託	福岡市土木局道路建設部西部建設第2課
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎(調査年度)、生田征生(整理年度)
調査総括	埋蔵文化財課 課長 山崎純男
	埋蔵文化財課調査第1係長 山口謙治
調査庶務	文化財整備課 宮川英彦
調査担当	埋蔵文化財課調査第1係 久住猛雄
調査作業	柴田常人、高木美千代、田中聰、田中和古、徳永洋二郎、中山竹雄、平山栄一郎
整理作業	中斐田嘉子、日下部由美子、富田輝子、成清直子、廣田容子、上方高弘

II. 遺跡の立地と歴史的環境 (Fig. 1)

福岡市の西側に位置する早良平野は、東側を平尾丘陵、南側を背振山系、西側を背振山系から派生した叶岳に囲まれる。北は博多湾に面し、平野中央を室見川が南から北に貫流する。平野内には幾つかの洪積台地も点在するが、大部分は室見川と西から十郎川、名柄川、金屑川などの沖積作用により形成された平野である。また室見川河口には愛宕山などの第三紀層の独立丘陵が存在する。一方、海岸部には湾内の回流作用と風成砂によって、生ノ松原や百道浜、姪ノ浜などの弓状の砂丘が形成される。また古くには、各砂丘の背後には海が入りラグーンをなしていたと考えられる。

野方平原遺跡は、早良平野の西側の、叶岳の北東裾部に広がる扇状地台地の一角に立地する。調査地の南には野方中原遺跡(国指定史跡野方遺跡)、南東から東には野方久保遺跡といった弥生時代から古墳時代の大規模で有力な集落遺跡が立地している。野方中原遺跡は環濠集落として著明で、弥生後期中頃から終末期の大量の土器群を出土している。環濠(環溝)には卵形で内部に同時期の竪穴住居を伴うA溝と、小型方形で内部に倉庫かとみられる掘立柱建物2棟前後が伴うB溝がある。土器群の時期から、両者は時期的に一部共存するが、B溝の成立時期の方が遅い可能性がある(弥生終末か)。また、環濠外の部分での確認調査では古墳時代前期の遺物の出土が多いようだが、弥生時代後期の遺物もあり、

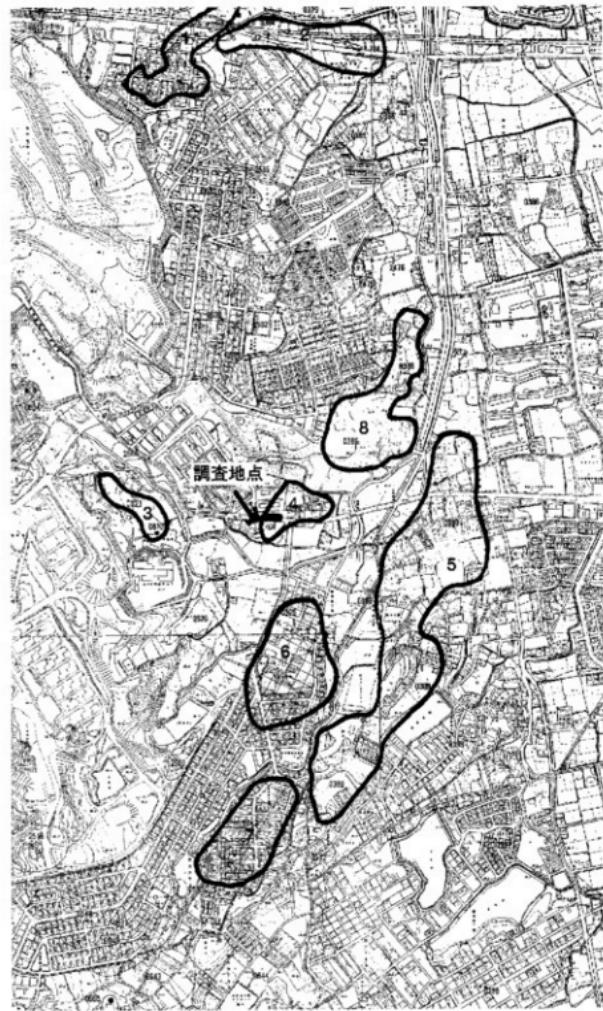


Fig.1 野方平原遺跡と周辺の遺跡 (1/12,000)

- 1.宮の前遺跡
- 2.湯納遺跡
- 3.野方岩名隈遺跡
- 4.野方平原遺跡
- 5.野方久保遺跡
- 6.野方中原遺跡
- 7.野方塚原遺跡
- 8.内ヶ浦遺跡

の中心は農耕であったことがうかがえる。野方平原遺跡の西側には野方岩名隈遺跡があり、弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡がある。このように野方地区は弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡が集中し、当時は重要な拠点であったことがうかがえる。野方遺跡群から北方1kmには、宮の前遺跡が

環濠の内外に住居群があった可能性があり、その差が注目される。同時期の集落は野方久保遺跡でも多数見つかっており、同一小地域内で環濠を営む集團とそうでない集團の階層差が想定される。野方中原遺跡および野方塚原遺跡では弥生後期後半から古墳前期前半の甕棺墓、箱式石棺墓、土壙墓が検出されており、一部に半肉彫獣帶鏡や内行花文鏡といった鏡(鏡片)、勾玉などの副葬がみられ、有力な墓地を形成している。野方塚原遺跡の墳墓の一部には小規模ながら区画なし埴丘の可能性を想定できるものもある。これらの墓地は、この地域の集團の首長層に関連するものであろう。野方久保遺跡では、弥生時代前期末から中期末までの甕棺墓も多数検出されており、弥生中期前半の甕棺墓からは細形銅劍と把頭飾が出上した。野方久保遺跡も弥生後期から古墳中期前半まで継続する大規模な集落であり、すでに100棟をこえる竪穴住居が検出されている。銅鏡の出土や、多数の鉄器の出土が特筆される。野方中原遺跡から多くの鉄器が出上しているが、野方久保遺跡も含めて、鐵鎌がやや多い他は方形板刃先(鎌ないし鎌)と鐵鎌類が目立ち、撲点集落ではあるが集落の生産

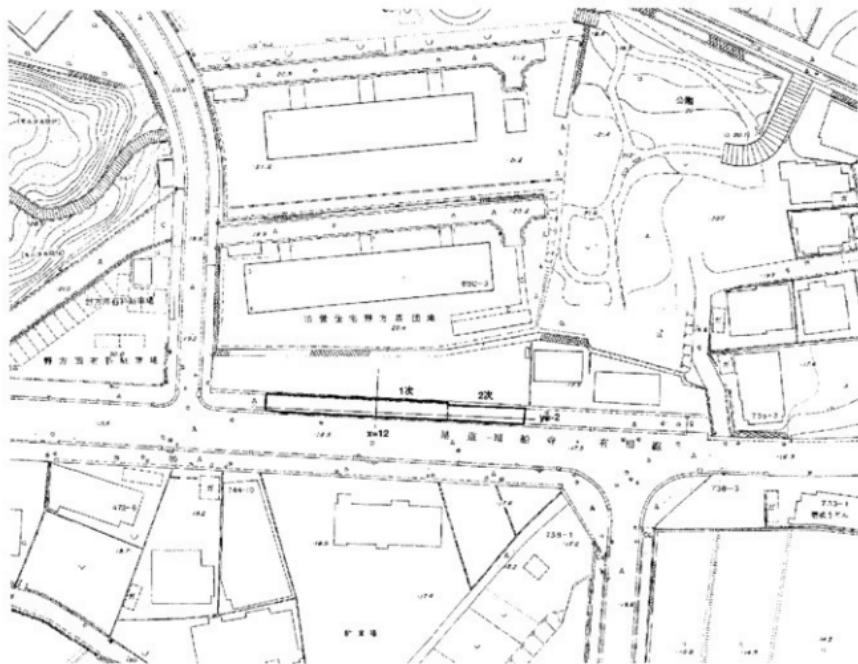


Fig.2 野方平原第1次・第2次調査地点 (S=1/1,000)

あり、弥生時代終末期から古墳時代前期の集落と墓地がある。C地点1号墳は、弥生終末期の全長15m前後の前方後方形の可能性もある墳丘墓であり、中心に大型箱式石棺を有し、墳裾に副次的埋葬施設があり、古墳時代初頭までの祭祀上器群がある。今回の調査の原因となる拡幅工事を行なうことになった周船寺有田線に相当するルートは古代からの主要な交通路であり、糸島方面に抜ける広石峠の手前の山麓一帯には、6世紀中頃以降、横穴式石室を主体とする、コノリ古墳群、広石古墳群、広石南古墳群といった6～7世紀の有力な群集墳が多く造営される。特に広石古墳群はかなり大きな古墳群で、武具、武器、馬具を多く出土しているのが注目される。広石古墳群に続く時期の7世紀中頃から後半には、桁行4間以上の大型掘立柱建物9棟を含む26棟の掘立柱建物群、竪穴住居43棟などからなるやや特殊な拠点的な集落である広石遺跡群(生松台)があり、663年の朝鮮半島における白村江の戦い前後の国際的緊張時における、早良平野から糸島平野の今宿方面へ抜ける主要交通路上の重要な軍事的拠点の可能性さえ考えられる。なお野方地区一帯は、古代の「倭名類聚抄」に見える早良郡六郷のうちの「額田郷」にあたると考えられている。

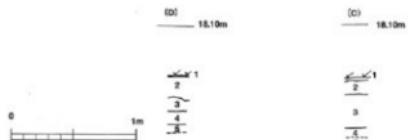
III. 調査の記録

1. 調査の概要

本調査地点は、福岡市跡遺分布地図上の野方平原遺跡の想定範囲の南端付近にあたるが（Fig. 1）、南東に低く北西に高く、すでに北西側は基盤の花崗岩まで削平されている状況である。野方平原遺跡の想定範囲は周囲、特に北側は戦後の団地造成などすでに破壊・削平されている部分が大きいと観察される（Fig. 2）。なお調査地点の標高は16.5~19.5mである。調査は重機による表土の除去作業から開始した。第1次調査は土置場の関係上から東西に反転調査を行なっている（Fig. 4）遺構検出面は、1次調査区西側では薄い表土直下で花崗岩盤が露出し、1次調査区中央前後は花崗岩媒乱土、1次調査区東側から2次調査区までは花崗岩媒乱土基盤の上に斜面堆積した赤褐色土と媒乱土ないし花崗岩砂礫の混合層である。基本土層はFig. 3に記した。検出した遺構の密度は比較的薄い。1次調査では、反転後西側調査区（II区）は削平が著しく遺構は検出されず（擾乱のみ）、反転前東側調査区（I区）からは柱穴14、竪穴住居の壁溝の痕跡の可能性があるもの1、溝状土坑1を検出した。2次調査では、半円状の溝状遺構1、柱穴4、土坑2、遺物包含層の落ち込みらしき不明遺構2を検出した。



Ph.1 1次調査1区全景（西から）



1. バラスチ葉虫
2. 増殖糞丸+土壌活性剤・粉粒・液体
3. 錠粒かすりしまる。増殖糞丸→底質活性土
4. [例] 苔原糞丸+小糞粉（=堆肥粉）しまり甘い
5. おこにぎの汚れ等、薬剤要件→底質活性土。撒じこむ少し
6. バラスチ堆肥丸土
7. 高濃度堆肥丸+小糞・底質・堆肥・底質の土
8. 増殖糞丸+底質活性土・粉粒・小糞
9. 通気性をもたらす「アーチ型」通気孔付
10. 増殖糞丸+堆肥用糞丸をいじらす
11. 山根糞丸日本製の土壌にまぶす
12. 実験用堆肥丸（糞丸・草木）

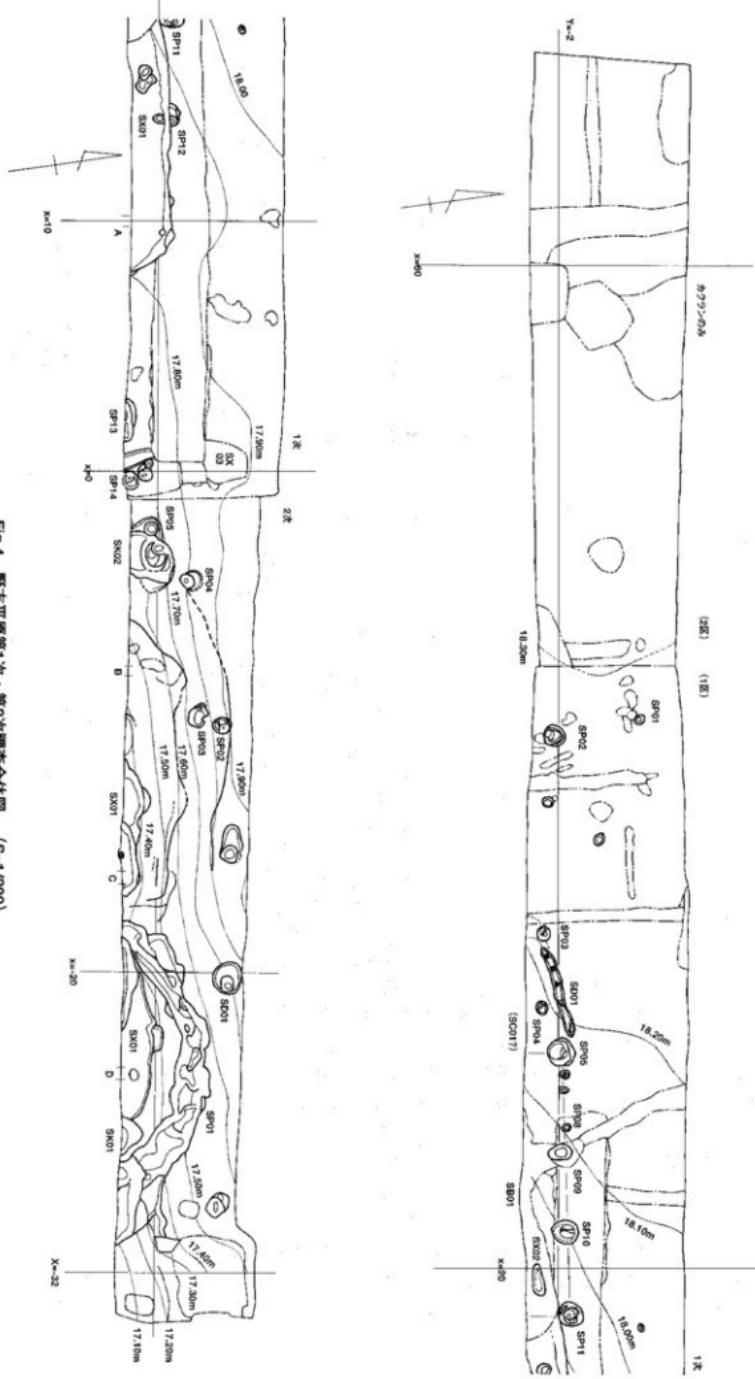
Ph.2 1次調査2区全量（東から）



1. バラエシ培養地土
 2. にふい園各一等培養地土。適度じり。
 3. うと園各（土工化、腐食化）。微生物生産
 4. 培養地土（一等化）。しまりやけいかくこししまる、
微生物（旺盛場）
 5. 木と園各か、少し汚れでいい（つけてあるにふい園園地）
 6. 腐葉培養地土。木と園各（木と園）

Fig.3 調査区基本土層A~D (S=1/40)

Fig.4 野方平原第1次・第2次調査全体図 (S=1/200)



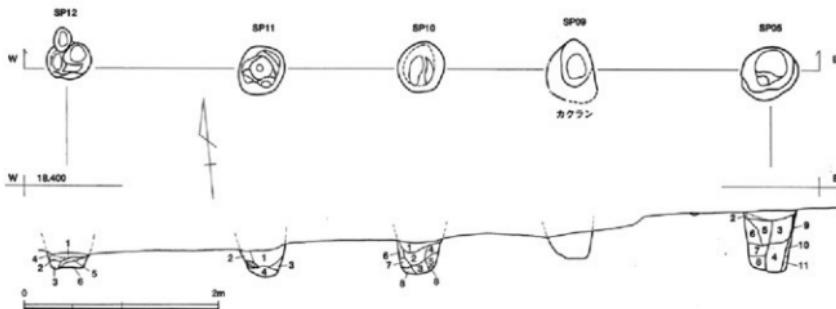


Fig.5 1次SB01平面図・断面図 (S=1/50)



Ph.3 1次調査SB01全景 (西から)

SB01柱穴土層説明

2次調査では、遺構検出面の地山面は南側の道路に下がる斜面をなすが、この上に斜面堆積した遺物包含層が認められた。ただしこの包含層は、表土直下であり土質が軟質であるなど、比較的近年の二次的堆積層とみられる。2次調査の出土遺物の半分がこの包含層からの出土である。

出土遺物の総量は、1次・2次調査合わせてパンケース3箱程度であり、いずれも破片・小片が多い。2次調査の方が出土遺物の量が多い。1次調査では、古墳時代の土師器、近世の陶磁器・素焼土器、鉄滓が出土した。2次調査では、奈良時代から平安時代前期の土器を主体とし、飛鳥時代～平安時代の土師器・須恵器、古墳時代の土師器、弥生時代後期の土器、古代の瓦、鉄滓が出土した。調査面積は、1次調査が110m²、2次調査が48m²である。なお第1次調査時に、第2次調査を予測して座標杭を周囲に設置してあったので、1次・2次調査の任意座標系は同一のものになっている。

- SP05**
- にかい(淡赤) 黄褐色土。小粒・砂粒含む(やや暗く黒る)
 - にこった黄褐色土。淡赤色地質。小粒含む
 - にかい(暗)～黄褐色土(底土) 小砂粒・砂粒含む。色より暗い
 - にかい(暗)～黄褐色土。しまりややせい。3.2リットル地。色より暗い
 - にこった黄褐色土(暗い) + 淡赤色地質土。
- 花崗岩を含む事有り
- 明るにかい(黄褐色地質土。淡赤色土少し。砂多い。しまりややあり)
 - にこたたにかい(黄褐色地質土)
 - 黄褐色地質土
 - にこたた黄褐色土。3との間の土質
 - 1と2同じ
 - 1と2同じ
- SP10**
- 淡黄色～淡褐色地質土(暗赤)
 - にかい(黄)～黄褐色土。しまりややせい
馬(?)糞か
 - (柱跡) 黄褐色～黄褐色土。粘質土。しまりややあり
 - にかい(黄)～黄褐色土。白色砂粒含む。やや明るい
 - にかい(黄褐色～黄褐色土。2に近い)
 - 4と2同じ
 - にかい(黄褐色土(底土と粘土層)) しまりややせい
 - 花崗岩地土(黄褐色白化) 有れ

- SP11**
- 薄っかい(黄褐色地質土。
しまりやや多い)
 - にかい(黄褐色土。しまりややあり)
 - 2と同色。しまりややせい
 - にかい(黄褐色～黄褐色土
堆積地質)
- SP12**
- 淡黄色地質土。しまりあり
 - 淡黄色地質～明褐色土。(より明)
 - (柱跡?)
 - 薄っかい(褐色～にかい(褐色土
堆積地質))
 - 1と2同じ
 - にかい(明褐色～黄褐色土。小粒含む)
 - 6と2同じ

2. 検出遺構 (Fig.4)

以下では、1次・2次調査の検出遺構についてまとめて報告する。また、遺構名称(番号)は各次ごとで振っているので、同じ遺構番号が存在する場合がある。その場合、頭に次数を付して区別している。また全ての遺構について報告する紙幅はないので、主要な遺構について報告する。

・1次SB01 (Fig.5, Ph.3)

1次調査Ⅰ区中央南で検出した。5つの柱穴からなり、東西の桁行である。柱間は平均1.2m弱で、桁行5.95mのやや大型の掘立柱建物である。北側には柱間1.2mに当たる部分に柱穴は無く、梁間は調査区外の南にのびるのであろう。柱穴の底面はおおむねレベルが一致する。柱穴掘方の径は40cm内外で、土層を検討すると柱痕のあるもの(SP05,10,12)と柱を抜き取られていると考えられるもの(SP09,11)がある。出土遺物は土師器の網片があるが、弥生時代終末から古墳時代までのいずれかの時期のものであろう。SP05からベンガラ(赤色顔料)が出土。

・1次SC01 (?) (Ph.5)

1次調査区Ⅰ区中央や西で検出。やや弧状となる細く浅い溝である。幅17cm前後、1.8m長である。溝はきわめて浅いが、小ピット状のくぼみが約30cmごとに検出されたことと、南側の検出面が、当初地山とするにはやや濁ったような土質であったため、溝を竪穴住居の壁周溝とし、また南側に貼床の最下部が残存したものであると判断した。きわめて残りが悪く、ここでは竪穴住居址であった可能性を指摘するにとどめる。時期は全く不詳である。

・1次SX01 (Fig.4)

1次調査区Ⅰ区東側南部で検出した溝状の土坑。東西5m以上(西側に擾乱)、南北0.8m以上(南は調



Ph.4 1次調査Ⅰ区作業風景（東から）



Ph.5 1次調査SC01 (?) (北から)



Ph.6 1次調査Ⅰ区西半（西から）

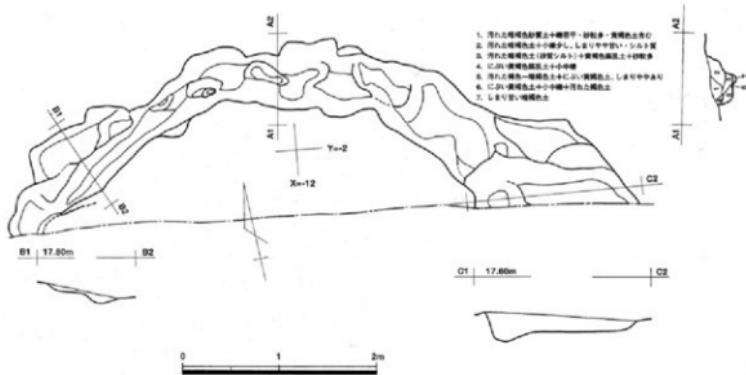


Fig.6 2区SD01平面図・断面図 (S=1/50)

査区外)、深さ30~40cm前後。軟らかい灰色~灰褐色土を覆土とする新しい遺構。近世後期の遺物と鉄滓を若干出土した。

・2次SD01 (Fig.6, Ph.9)

2次調査区東側で検出。半円状(弧状)をなす溝。径6.5m、幅40~80cmと出入りがあり、南東側の調査区外へ続く部分はさらに広がる。底面は一定せずに凸凹がはげしい。中央である北側から東と西へ何かを流すような溝である。出土遺物には古代の土師器・須恵器、石製品があるが、鉄滓もわずかにみられる (Ph.13)。あるいは製鉄炉に伴う排滓溝であろうか(製鉄炉が検出されていないので確証はない)。遺構の時期は遺物から奈良時代であろう。

・2次SK02 (Fig.7, Ph.10)

2次調査区西側で検出。東西100cm×南北70cm以上の不整円形土坑。北西側のピットは別遺構であろう。北側はテラス状をなし、また南北土層の検討から柱穴の可能性もある。深さ30cm前後。出土遺物に



Ph.7 2次調査全景 (西から)

Ph.8 2次調査全景 (東から)

は、古代の土師器・須恵器の細片があり、時期を示すか。鉄滓もわずかに出土し、時期的にもSD01と関連する遺構か。

・2次SX01 (Fig.4, Ph.8・9)

2次調査区西側南部で検出。遺物包含層下部の凹みである。飛鳥時代～古代前期と弥生時代後期の遺物が出土している。

3. 出土遺物 (Fig.8・9, Ph.13～15)

出土遺物は小片が多いので、図化可能なものは努めて図示した。またPh.14の各遺物写真の右下の番号はFig.8・9の遺物番号に一致している。

・1次調査出土遺物 (Fig. 8)

1・4はSX01出土。1は蓋としたが小碗の可能性もある。肥前系染付磁器。青味がかった灰白色釉で、精良な灰白色胎土。2は肥前系染付磁器の丸碗(茶碗)。やや青緑がかった灰色釉で、淡灰色胎土。

1・2は18世紀中頃～後半。3は中世後期～近世の土師質土器。壺というより簡状の器形か。色調は10YR5/2-7/3。4は奈良後期(8世紀後半)の須恵器の壺の底部小片。高台が退化したもの。灰色で胎土精良。5はSX02出土の須恵器の壺身の小片(壺蓋の可能性もある。底部付近は回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。やや青味のある灰色の精良胎土。Ⅲ期前後か。6はSP10出土の弥生時代終末から古墳時代前期の在来系甕の胴部下半と推定される破片である。外面はタテハケ後ナデ、内面はヨコハケないしナナメハケ。外面に煤が付着。胎土の地の色は黄茶褐色。この遺物がSB01の時期



Ph.9 2次調査SD01全景（西から）



Ph.10 2次調査SK02（北から）

1. にぶい褐色～暗褐色、小砂礫やや多
 2. にぶい暗褐色、しまり甘い
 3. 色は1と同じ、小砂・炭・灰を含む
 4. にぶい褐色～黄褐色土
 5. 深褐色褐色土にぶい暗褐色土
 6. にぶい褐色～暗褐色土、うすい汚れ
 7. 黄色～淡黃褐色シルト(油山削れ)
- A. 黒土 (バクスナ腐食土)
B. 黑褐色褐色土互層、小砂礫含む
C. 10YR5/2褐色褐色土互層 (～にぶい褐色)
古代的堆積 (T-9c) 土器含む (二次地盤)
D. 黒く汚れた暗褐色土
E. 花崗岩碎屑混入地層
F. 黄褐色軟質粘土互層地層
G. 花崗岩岩盤

SK02土層説明

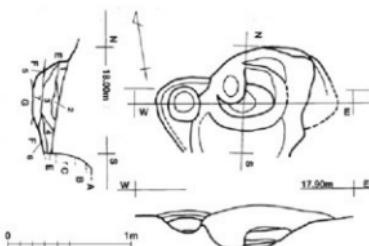
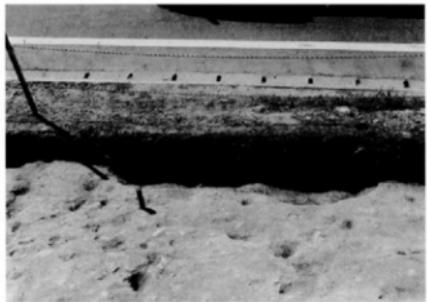
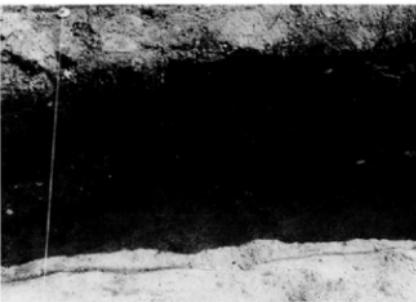


Fig.7 2次SK02平面図・断面図 (S=1/40)



Ph.11 2次調査SX01（北から）



Ph.12 2次調査SX01遺物出土状況（北から）

を示すかどうかについてはやや慎重になりたい。7は古式土師器の高杯の脚部とみられる。器面は摩滅し調整不明瞭。明橙色～黄橙色で砂礫は石英・長石を少量含むが精良な胎土。器形は在来系的だが、内面ケズリ、杯底部(脚柱部頂部)が充填技法らしいことから古墳時代前期中頃か。

その他、1次調査では、SP10から赤色顔料(ベンガラ)が出土した(Ph.15)。またSX01、SX02から鉄滓が出土している(Ph.13)。赤色顔料は、柱穴を掘削中に赤い土粒の存在に気付き、土中の自然の赤い部分である可能性もあったが、真紅色であったため念のため現場で取り上げた。報告書作成中に福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎によりX線回折分析を行われたが、ベンガラの主成分であるヘマタイト(酸化第二鉄、 Fe_2O_3)のピークが多く検出されたためベンガラであることが判明した(Fig.10、なおSiO₂は石英で土中の成分)。何らかの祭祀に用いたものか検討を要する。ただし量的にはわずか数gの検出である。SX02の鉄滓は炉壁の一部か。またSX01の鉄滓は造構から近世の可能性もあるが、調査区全体では奈良時代の遺物が多く、2次調査区でその時期の鉄滓があることから、これらも奈良時代の可能性がある。なおいずれの鉄滓も5cm内外以下の小型のものである。

・ 2次調査出土遺物 (Fig.9)

8・11はSD01東半出土。8は土師器の甕。復元口径28.0cm。明橙色～明黄褐色。石英・長石をやや多く含む胎土。胴部外面タテハケ、内面ヘラケズリ。口縁部はヨコナデ、内面の一部はヨコハケ残る。9は須恵器の皿の蓋。復元口径19.9cm。外面天井付近が回転ヘラケズリの他はロクロヨコナデ。灰色ないし淡灰褐色。8・9は奈良時代の範疇。10は土師器質の土鍤。明橙色～橙灰色。胎土は精良。11は砥石。両面を利用。きめ細かい黄灰色の石で砂岩か。12・13はSX01出土の弥生時代後期土器の底部。いずれも後期前半～中頃までのもの。12は厚い凸レンズ気味の平底で、外表面はタタキ後ヘラナデ、内面はヘラ工具痕がありユビオサエおよびナデ仕上げ。底部接地面には軽痕や植物状の圧痕がある。暗褐色～暗黄褐色で胎土は粗く、石英・長石をやや多く含む。甕の底部か。13はやや厚い平底で壺の底部か。外表面タテハケ、内面ナデないしユビオサエ。にぶい橙色ないし黄褐色。石英・長石を少量含み、やや粗い胎

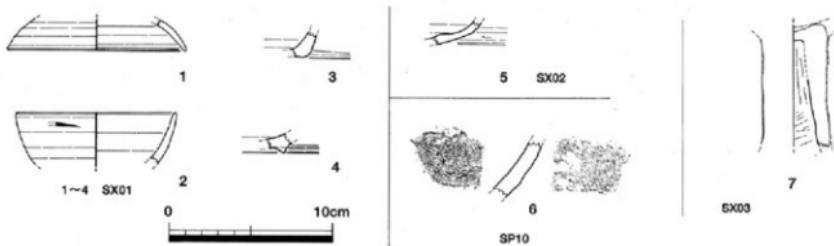


Fig.8 第1次調査出土遺物実測図 (S=1/3)

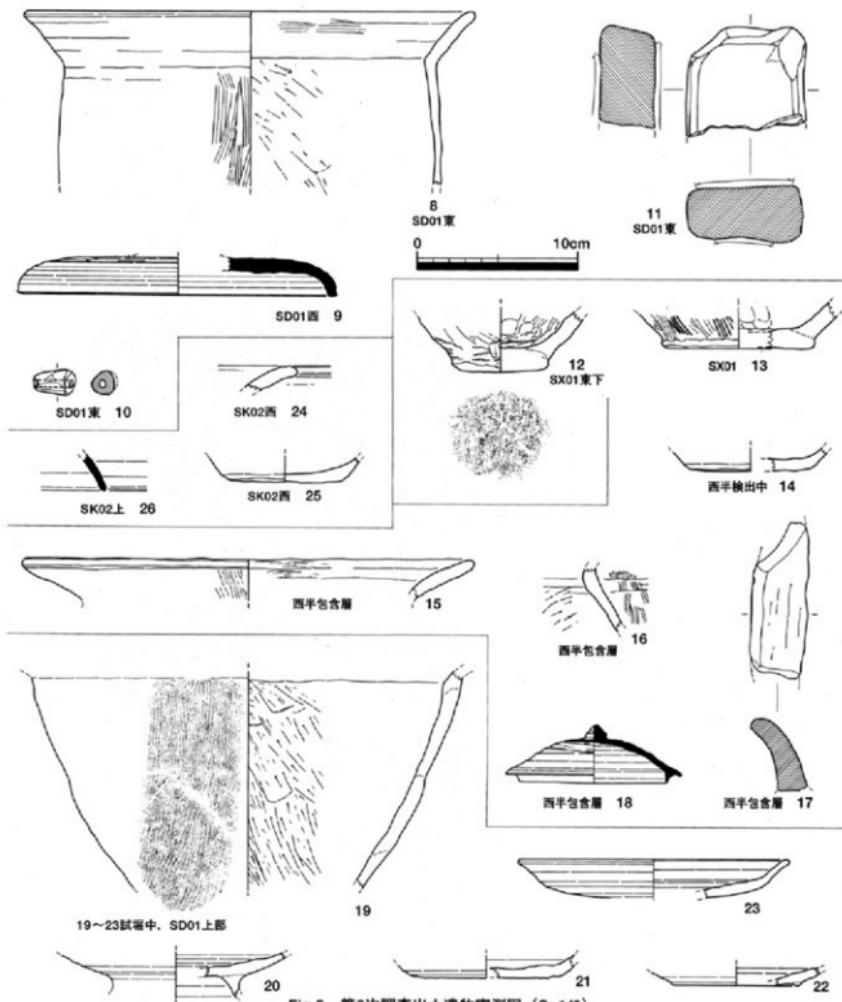
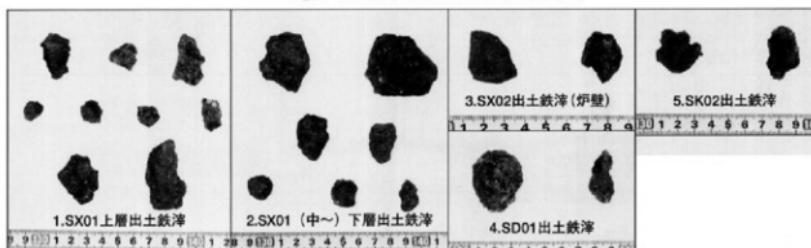
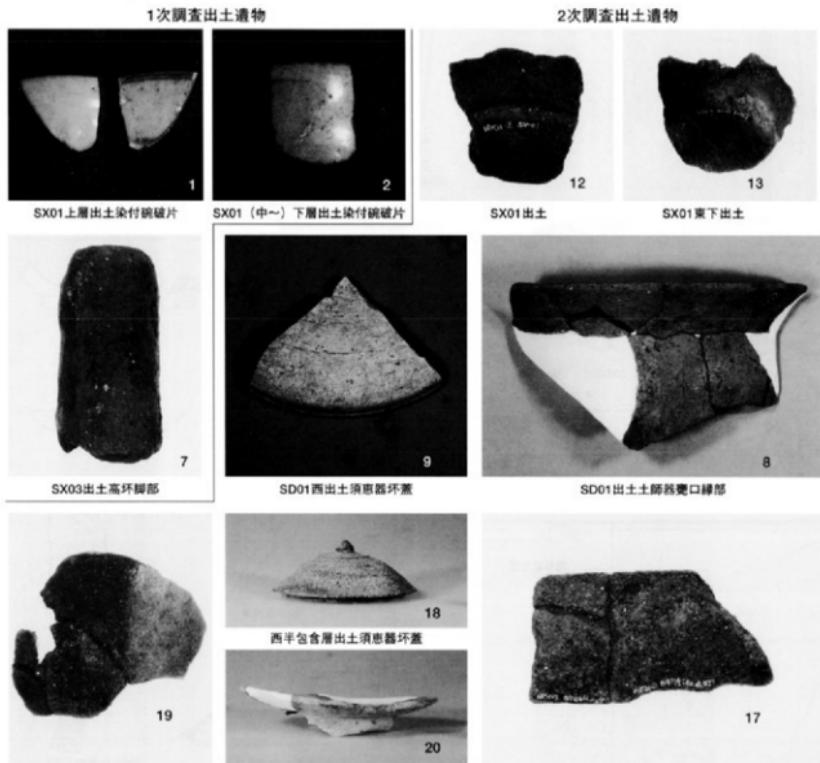


Fig.9 第2次調査出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph.13 第1次・第2次調査出土製鉄関係遺物(鐵滓)



Ph.14 出土遺物

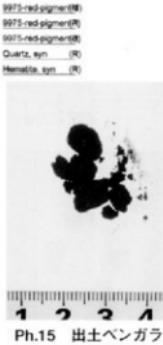
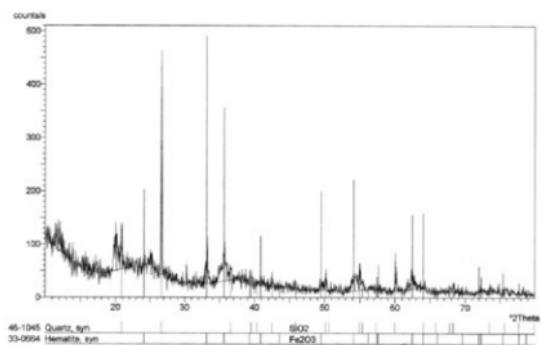


Fig.10 赤色顔料分析グラフ

土。14は調査区西半検出中出土の土師器の壺。底部はヘラ切り。奈良時代。ややにぶい橙色を呈し、石英・長石の微粒と赤色粒子を含む。15・18は調査区西半遺物包含層(SX01ほか検出面上部)の出土。15は奈良時代の甕の口縁部。復元口径28.2cm。外面タテハケ後ヨコナデ、内面ヨコハケ後ヨコナデ。にぶい橙色～にぶい黄褐色。長石・石英・雲母・角閃石を含む。16は古墳時代後期ないし飛鳥時代の土師器の甕。外面タテハケ、内面ヘラケズリ、頸部内面はナデ。黄褐色～にぶい橙色。石英・長石を少量含む。17は土師器のカマドの焚口部の覆部(庇部)か。にぶい橙色。長石・石英・雲母を含む。18は須恵器の壺蓋。宝珠つまみが付く。内面かえりが丁寧で下方に突出し、Ⅳ期最新相～V期で飛鳥時代中頃。口径9.2cm、最大径11.0cm。外面は、つまみ部はヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。内面はクロ回転ナデ、ヨコナデ、天井部はヨコナデ後ナデ。暗灰色～灰色で、外面上半に黄灰色の灰かぶり。胎土精良。19・23は2次調査開始時の調査区東半試堀中の出土。SD01周辺の検出面上部の包含層出土と考えてよい。19は土師器の鉢状の甕または瓶か。復元頭部径26.8cm。飛鳥～奈良時代。外面はタテハケ、内面ヘラケズリ。にぶい橙色～椎褐色。外面に黒斑。石英・長石をやや多く、また雲母を含む。20は土師器の高台付壺。内外面ヨコナデ。明橙色～黃橙色。胎土は精良。奈良時代後半～平安時代初期。21は土師器の壺。奈良時代。内外面ヨコナデ。明橙色。胎土精良。22は土師器の高台付壺(塊か)。平安時代初期(9世紀)か。内外面ヨコナデ。明橙色～にぶい淡橙色。胎土精良。23は土師器の皿状の壺。奈良時代後半～平安時代初期か。復元口径17.0cm。明橙色から黄褐色。石英少量含むが胎土精良。

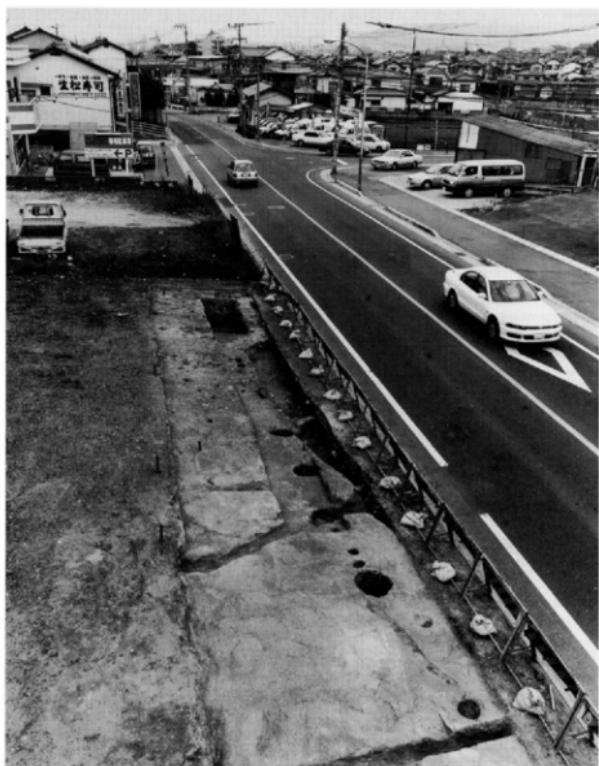
その他、2次調査区からはSK02、SD01から鉄滓が出土した(Ph.13)。いずれも小型のものである。1次調査出土のものも含め、分析などを経ていないのでどのような性格の鉄滓かは保留しておく。

IV おわりに

野方平原遺跡の調査は初めてであったが、調査の結果、弥生時代後期から平安時代前期、近世後期の遺構と遺物が検出された。遺跡全体の残りは悪いが、遺跡の存在と時期幅が判明しただけでも貴重な成果である。また古墳時代の建物におけるベンガラの検出は、類例を含め今後の検討課題である。



Ph.16 第2次調査作業風景（西から）



野方平原遺跡

—第1次・第2次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第729集

2002年(平成14)年3月29日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社あさひ印刷所
福岡市博多区東比恵3丁目26-16